

氏名 やま だ り え 山田理恵 教授



主な研究テーマ

- 俘虜（捕虜）生活と体育・スポーツ活動
- 日本の伝統打球戯の変容過程と文化的意義に関する研究

平成24年度の研究内容とその成果

上記主要研究テーマのなかから、ここでは、日本の伝統打球戯に関連する研究について述べることにします。

これまで継続して、日本の伝統打球戯の変容過程、独自性と文化的意義に関する研究に取り組んでいます。その成果として、前近代では武芸として行われていた打球戯が、近代に入っても、学校における児童の遊戯種目としてあるいは運動会種目として行われるなど、その形態と目的を変容させながら継承されていたことなどを明らかにしてきましたが、研究を進めるなかで、さらにその背景として、近代の学校教育において児童の遊戯がどのように論じられていたのか、すなわち、当時の教育者による体育論や体操科とその教材としての遊戯論についても触れておく必要があると考えました。

そこで、日本の教育史に偉大な足跡を遺した大瀬甚太郎（1865年－1944年）と山松鶴吉（1872年－1942年）による『講習用書小学校教育法』（同文館蔵版、1907年）（国立国会図書館蔵）を取り上げ、彼らの体育

論、体操科の教授法や教材論について検討しました。

大瀬甚太郎は、「西洋教育史研究の開拓者」として知られています。多くを述べるまでもなく日本教育史上偉大な業績を遺し、その学統は、梅根悟、篠原助市らに受け継がれました。山松鶴吉は、学校経営論、学級編成論、学校図書館論の先駆者として著名な人物で、なかでも山松が1910年に著した『模範的小学校経営の実際』（同文館蔵版：東京）は、日本の教育史上「学校経営」をタイトルに掲げた著作としては初めてのものとされています。

その大瀬と山松の共著である『講習用書小学校教育法』は、両者が小学校教育を実施するにあたり必要であると考えた事項と実用的な教育法について論じたものです。大瀬と山松は、西洋教育思想の影響を背景に三育主義の立場に準拠していましたが、特に、小学校教育のなかで体育にかなりの重点を置いており、また、体育は訓育においても効果があると考えていたことが、本書から明らかとなりました。また、体操については、毎日の実践が大切であり、平日

は学校で、休日は各自必ず体操を行うこと、また遊戯では、地域の状況に合わせて教材を選択するべきである、というような点は、山松の著書『小學校各科教授の進歩』（1911年）においても述べられていることから、本書の一部は、後に山松の単著に発展的に継承されたといえます（継続して検討中）。

これからの研究の展望

今後さらに、明治期の体育論および遊戯論について検討し、そのような理論を背景に、当時の学校教育プログラムのなかで、伝統打球戯がどのような意図でどのように行われていたのか、ということについて考察していきたいと考えています。

さらに、現代に生きる日本の伝統打球戯という観点から、日本各地に伝わる伝統打球戯についても、継続して現地調査および

史料調査・史料吟味を行い、伝統的身体運動文化の意義と在り方について考察するとともに、薩摩の伝統遊戯・ハマ投げを継承し発展させるための方法の検討と実践も継続して進めています。日本各地で行われてきた（あるいは、かつて行われていた）伝統的な打球戯に関する情報をお持ちの方には、ぜひともご協力賜りますようお願いいたします。

また、第一次世界大戦時のドイツ兵俘虜の場合を中心に、俘虜生活における体育・スポーツ活動についても、継続して研究を進めています。



薩摩のハマ投げは、2組の競技者（1組は5名）が向かい合って、木の円盤を相手陣地に打ち返し合う伝統遊戯（第12回鹿屋体育大学学長杯破魔投げ大会より：山田撮影）